

## 執筆要領

雑誌名	韓國語學年報
巻	3
ページ	244-245
発行年	2007-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00000874/">http://id.nii.ac.jp/1092/00000874/</a>

『韓国語学年報』執筆要領  
(2007年3月現在)

1. 論文原稿の様式について

＊ワープロ原稿のみ受け付ける。手書きのものは不可。

- 1) 使用言語：任意の言語.
- 2) 分量：制限なし
- 3) 用紙サイズ：A4.
- 4) マージン（余白）：上は25mm, 左, 右, 下は30mm.
- 5) フォント：字体は, 和文, ハングルの場合は明朝体, 英文の場合はcentury など標準的な字体を用いる。（ゴシックは不可）  
大きさは, 本文は12ポイント, 注と参考文献は10ポイントを用いる.
- 6) 本文の1行の文字数：全角38文字.
- 7) 本文の1ページの行数：和文, ハングルの場合は38行, 英文の場合は49行（上記のマージンとフォントの大きさではこの行数が適当）.
- 8) ページ番号：打ち出さず, 裏面に鉛筆で薄く記入する.
- 9) 文字方向：原則として横書きとする。縦書きの場合には, 2段組とする.
- 10) ヘッダー, フッター：付けない.
- 11) タイトルページ（論文の第1ページ目）：論文タイトル, 氏名, 所属をこの順番に1行ずつ中央に寄せて書く。論文タイトルは太字（ボールド）にし, 上に空行を入れずに1行目から書く。論文タイトルと氏名の間は1行あける。所属の後, 2行あけてから, 本文を始める。（別紙の“タイトルページ見本”を参照のこと）
- 12) 注：ページ毎の脚注は付けず, 本文の最後につける。なお, 本文中の注番号は上付き半角文字を用いて, <sup>1)</sup> のようにする.

2. 要旨について

- 1) 使用言語：論文での使用言語以外の任意の言語(アジアの言語でも可).
- 2) 様式：基本的に上の“1. 論文の原稿様式について”に準ずる.
- 3) 分量：15－20行程度.
- 4) 論文タイトル, 氏名, 所属を必ずつける。（論文本体のタイトルページと同形式）

3. 提出物について

- 1) ハードコピー（プリントアウトしたもの）：論文原稿, 要旨各1部
- 2) 記憶媒体（CD, USB, フロッピーディスクなど）：論文原稿, 英文要旨をそれぞれ別のファイルで, ワープロファイル形式とテキストファイル形式で保存したもの。なお, ハングル専用環境の原稿の場合は, 「アレア・ハングル」でも可.

タイトルページ見本

↓タイトル (ボールドで1行目から), 名前, 所属はすべて中央寄せで  
現代朝鮮語の「目撃法」語尾雑考

←1行開け

浜之上幸  
神田外語大学

←2行開け

0. はじめに

←本文開始

菅野(1988:1034)によれば, 現代朝鮮語の目撃法は, 直説法, 推量法, 意志法, 命令法, 勧誘法と共に, 文法範疇としての法(mood)を構成し, さらに, この法は, 待遇法, 叙述／疑問, 詠嘆－婉曲－確言－確認, という3つの文法範疇と共に終止形で一つの形に融合すると述べられている.<sup>1)</sup> このように, 目撃法は……………

注、参考文献見本

《註》

1) 目撃法が含まれる終止形語尾を菅野(1988:1024)の表から抜粋して示しておく:……………

《参考文献》

神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店

権在淑(1992)「現代朝鮮語の用言の接続形－艦猿について」『Lingua』3 上智大学一般外国語

権在淑(1994a)「現代朝鮮語の接続形Ⅲ(－焼/－嬢)について」『Lingua』5 上智大学一般外国語

権在淑(1994b)「現代韓国語の接続形Ⅲ－辞について」『朝鮮学報』152

菅野裕臣他編(1988)『コスモス朝和辞典』白水社

菅野裕臣(1988)「文法概説」菅野裕臣他編所収

Anderson, L. B. (1986) “Evidentials, Paths of Change, and Mental Maps: Typologically Regular Asymmetries.” In Chafe et al. (eds.).

Anderson, L. B. (1982) “The ‘Perfect’ as a Universal and as a Language-Particular Category.” In P. J. Hopper (ed.).

Bondarko, A. V. (1991) *Functional Grammar: A Field Approach*. New York: John Benjamins.

Botne, R. (1997) “Evidentiality and Epistemic Modality in Lega.” *Studies in Language* 21:3.

Chafe, W. L. and J. Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, N. J.: Ablex.